

追 悼



故 古川俊之 先生 略歴

(1931年2月7日生～2014年10月21日没)

<職歴>

1955年3月 大阪大学医学部卒業
1960年3月 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
1972年3月 大阪大学医学部第一内科講師
1975年4月 東京大学医学部医用電子研究施設教授
1987年5月 東京大学先端科学技術研究センター教授
1989年4月 国立大阪病院院長
1991年5月 東京大学名誉教授
1996年4月 国立大阪病院名誉院長
2005年4月 長崎県立大学学長

<学会活動>

日本腎臓学会, 日本エム・イー学会(理事長), 日本医療情報学会(理事), 日本行動計量学会(理事), 日本計量生物学会(理事), 日本内科学会(評議員), 日本老年医学会(評議員), その他

●日本腎臓学会

1964年10月 学術評議員
1994年 4月 法人評議員
1983年10月 監事
1990年 7月 理事
1996年 4月 功労会員
2001年 4月 名誉会員

<受賞・勲章>

第5回ベルツ賞(1968年)「計量理論による腎機能とその疾病像の解析」
第10回ベルツ賞(1973年)「確率モデルによる老化と死亡率曲線のシミュレーション」
第8回日刊工業新聞技術・科学図書文化賞(1992年)古川俊之・柳田博明共著「バイオメーション革命」
瑞宝重光章(2009年), その他

<主な著書・編書>

日常検査の基礎知識シリーズ7 1975年
コンピュータ診断 1982年
多変量解析プログラムパッケージ入門 1983年
機械仕掛けのホモ・サピエンス 1987年
高齢化社会の設計 1989年
バイオメーション革命(古川俊之・柳田博明共著) 1992年
寿命の数理 1996年
ウエルカム人口減少社会(藤正巖・古川俊之共著) 2000年
Perspectives of Advanced Technology Science 2, High-Technology, Population Wealth and Health(ed.) 1995年
Biological Imaging and Sensing(ed.) 2004年, その他

<主な研究助成金>

1975年 昭和51年度トヨタ財団研究助成「社会福祉における医療計画策定のための計量疫学モデルの研究」
1980年 第11回三菱財団自然科学研究助成「逆方向問題として見た心筋興奮の機能的構築の解析」
1985年 昭和60年度日本医師会研究助成費「計量診断のための次世代ソフトウェアの研究」, その他

<社会活動>

(財)いきいき健康増進財団 理事
(財)医科学応用研究財団 理事
(財)医療科学研究所 理事
(財)医療機器センター 理事
(財)国際医療技術交流財団 理事
(財)本田財団 理事
(財)東洋紡百周年記念バイオテクノロジー財団 名誉理事, その他

古川俊之先生を偲んで

川崎医科大学名誉教授，岡山大学特命教授

梶谷文彦

昨年10月21日，本学会名誉会員古川俊之先生が逝去されました。突然の悲報を堀 正二先生(大阪大学名誉教授，大阪成人病センター名誉総長)からお聞きしましたが，葬儀はすでに身内だけで済まされたとのこと，大変に驚きとても信じられない思いでした。非礼だとは知りながら奥様に電話してお話を伺い，やっと本当なのだ実感しました。一昨年3月に医学助成財団研究会のエクスカッションで，奥様も一緒に震災後の松島を視察させていただいた時にはお元気で意欲的でしたのに，こんなに早くお別れが来るとは思ってもいませんでした。

古川先生は大阪大学ご卒業後，第一内科(故 吉田常雄教授)に入局され，大学院終了後，1960年に「尿管電解質転送機構よりみた Benzothiadiazine 系利尿剤の作用機序」で学位を取得されました。私が初めて先生にお会いしたのは学生として診察を見学させていただいた時でした。患者さんへの説明が非常に簡潔でわかりやすかったことが印象に残っています。

1965年，第一内科第4代教授に阿部 裕教授が就任され，診断と治療の最適化を図るために新しい概念である「クリニカル・サイバネティクス」を創生，システム内科学を推進しようとされていました。古い伝統を持ちつつの新しい息吹に魅力を感じて，1965年卒の私たち同期16名は，インターンを終了し翌年に阿部内科一期生として入局させていただきました。もちろん古川先生が阿部先生の良きパートナーであることは存じ上げていました。

腎臓グループには安東明夫君(大阪大学名誉教授)，高光義博君(兵庫医科大学名誉教授)と私を含めた5名が配属されました。グループリーダーは古川先生で，コ・リーダーが故 浦壁重治先生でした。グループの先輩は故 三木 謙先生，杉田 實先生(兵庫医科大学名誉教授)，折田義正先生(大阪大学名誉教授)，杉田かう先生，加藤俊夫先生，故 白井大祿先生など多士済々で，阿部先生が日頃いわれていた「個性を生かしたシステム プレー」が実践されているのを実感しました。腎機能検査，水・電解質，膜輸送，利尿薬などについて活発な研究が進められ，古川グループでは計測と制御の視点から，浦壁グループでは病態・生理学的視点からのアプローチが行われており，臨床は両グループが一体となって進められておりました。その成果として，1968年に「計量理論による腎機能とその疾病像の解析」でベルツ賞5周年記念賞を受賞されました。

教室主催の当初から，阿部先生はシステム内科学の推進のために臓器横断的研究グループを設けるお考えで，古川先生をリーダーとして各研究室から有志を募り，「情報科学研究室」を立ち上げられ，私も加えていただきました。その後，工学部電子工学科(故 宮脇一男教授)の稲田 紘先生(東京大学工学部元教授)と医学部の私との助手交換が行われ，基礎工学部の鈴木良次教授などとも医工連携が進められました。

情報科学研究室には井上通敏先生(大阪大学名誉教授，国立大阪医療センター名誉院長)，北畠 顕先生(北海道大学名誉教授)，林 隆一先生(富山大学附属病院名誉教授)，堀 正二先生など多くの若い先生方がおられ活気に満ちておりました。腎臓関係の研究は，体液制御機構のシミュレーションと浮腫の制御病態，腎異物排泄のモデル解析，多変量解析によるネフローゼ症候群の治療効果の予測，マルコフ過程による腎

不全の予後の解析などでした。当初、シミュレーションは医学部基礎棟に設置されていたアナログコンピュータを用いて行っておりましたが、私は先生に回路の設定法などについて基礎から教えていただき、大変感謝しております。

先生は1975年に東京大学医学部医用電子研究施設基礎医学部門教授に、人間工学、航空医学の権威である大島正光先生の後任として着任されました。同研究施設では人工心臓で高名な臨床医学分野の渥美和彦教授や基礎工学部門の斎藤正男教授と強固なタッグを組まれ、世界の生体医工学をリードされておりました。古川研究室はオープンな雰囲気、何度も訪ねて相談に乗っていただきましたが、アフター6の一杯はとりわけ魅力的で楽しみでした。

古川先生が大阪大学情報科学研究室、東京大学、国立大阪病院を通して取り組まれたグローバルなテーマは「生命力」の概念の導入と、モデル化と定量化であったと思われます。第10回ベルツ賞はこのテーマに対してのものでした。ヒトの死亡曲線は機械などの故障とのアナロジーがあり、初期故障、安定期の偶発故障、そして部品の損傷による摩耗故障に対応させて、混合ワイブル「Weibull」関数で表現できることを世に先駆けて示されました。これによってさまざまな国や地域、あるいは異なる時代の寿命曲線を定量的に評価することが可能になりました。多様な疾病の寿命モードの比較や医療技術の進歩、疫学的介入効果の定量的評価などにも応用可能になってきました。「生命力」に関してより深くご教示いただきたかったと後悔しております。

医療分野に情報科学を導入されたご功績に対し、先生の教えを受けた一人として深甚の敬意を表したいと思えます。“発想がきわめてユニーク”で“考えがぶれない”先生でした。

先生は、瑞宝重光章はじめ多くの賞を受けられましたが、受賞のことを私たちに告げられることはご性格からほとんどありませんでした。「己の分を尽くせ」とのメッセージだったと考えております。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

古川先生、ありがとうございました。